

仮面ライダーエレクトロ

ディーボーイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

物語の舞台は日本にある都市”五反市”。

市内にある”飯ヶ谷高校”に現れた弱気な転校生・在形作人。

作人は転校前の記憶はなく、『ドールプロジェクト』という言葉と『暗い部屋にずっと一人だった』ということしか覚えていない。

同じ高校に通う同じクラスの内光高貴、天道軍と出会い、オカルト部へと引き入れられる。

さらにオカルト部で”ドール”の存在を知るセクレ、クラスリーダーのラブと出会う。

そんな中、飯ヶ谷高校では怪奇現象が多々起きていた。

それを解決するべく夜に学校に侵入した作人、高貴、軍の三人だったが、謎の怪人・スプーキーと謎の科学者・騎丸次郎が現れる。

スプーキーを止めるべく、三人は騎丸次郎から各三種類のドイツシュドライバーを受け取って作人Ⅱソウル、高貴Ⅱスマート、軍Ⅱシャインへと変身した。

これを機にオカルト部での本格的活動を始め、絆を深める作人とオカルト部、そして飯ヶ谷高校の生徒達との日常が始まった。

目次

EP : 1 『僕達の変身』

1

EP:1 『僕達の変身』

ここは日本の都市、五反市にある”飯ヶ谷高校”。
とある教室に、先生らしき人物と転校生であろう青年がやってきた。

「お？ 転校生？」

「男かようつまんねえな」

「なんか地味めじゃない？」

教室内に、生徒たちの話し声が響く。

「静かに！ 今日から2年A組に新しい人が入ってきます！ 自己紹介してね」

「は……はい、僕の名前は……在形作人です……よろしく……お願いします」

「あるかた、さくと？ 変な名前（笑）」

「あいつの親のネーミングセンス無いな（笑）」

たくさんの視線を感じて恥ずかしくて顔が下向きな作人。
そんな作人を見つめてニヤけている人がいた。

「コウちゃん、新しい野郎見てなにニヤニヤしてんだ？」

「んー、何か人知れぬ魅力を持っている感じがするんだー」

「なんだそれ、気持ちわりい」

キーンコーンカーンコーン

「チャイムが鳴ったわよ！ 起立、礼」

生徒が起立をして礼をすると共に、教室からぞろぞろと生徒達が出てくる。

教室に残ったのはさっきの転校生、在形作人と2人の生徒だった。

「ちよつといいかい？ 在形作人くん」

「あ……はい？」

「俺の名前は内光高貴、コウちゃんと呼んでね。隣にいるのはこの教室の中で一番おバカなグンタロスさ」

「おい!! 俺はバカじゃねえよ! あとグンタロスじゃなくて天・道・軍だ!」

「とりあえずクラスメイト同士、よろしくね」

「う、うん……それで何か用？」

「そう、ちよつと作人くんのこと知りたくてね。ここに来る前は何かをしていたんだい？」

「ああ……それがね、ここに来る前は僕はあまり覚えてなくて……」

「あ? ……それってどういうことだ？」

「僕は山奥で倒れていて、それで目が覚めたら博士の研究所にいたんだ。覚えてるのは“ドールプロジェクト”って変な言葉と暗い部屋に閉じ込められていたことくらいなんだ」

「そうか……そういうのに僕は魅力を感じていたんだ!! 放課後に僕のもとにおいでよ!」

「わ、わかった」

内光高貴、髪型は頭部から右耳の横まで流れるような前髪で、白いVネックシャツに黒のジャケット、黒のスニーカーを履いている。二重と大きな瞳があり、細身の体を持つ。

天道軍、ツツパリヘアスタイルに赤いパーカー、胸元に見える黒いシャツ、青のジーパンを履いている。目は細く、ガタイの良い体を持つ。

——そして放課後

「……は……どう？」

作人が案内されたのは飯ヶ谷高校の第一理科室。

「まーたお前、強引に部活に入れる気してんのかよ……」

以前にも同じようにオカルト部に入った軍が呆れる。

「ようこそ！ オカルト部へ！」

高貴が作人の手を引っ張って第一理科室に入る。

「なにー？ コウちゃん、また男子連れてきたの？」

「別に男だろうが女だろうが男女じゃなくてもいいだろう？」

「え、その人LGBTなの？」

「い……いや違うよ！」

「それはすまないね！ ウチの名前はセクレ、オカルト部女子2人のうち1人よ」

「え、もう1人いるの……？」

「おおおお！ 転校生じゃなくいい！」

「作人くんの魅力に惹かれてオカルト部に誘ったんだ」

「こんな人に誘われるのは可哀想だけど来てくれてありがとう！ あとすつつごくかわいい顔してるわよね〜！ あ、私はラブ！ 2年A組のクラスリーダーだからよろしく♡」

作人の頬を触ってプニプニしているラブの手を強引に引き離れた。

「それでちよつとセクレに聞きたいことがあるんだけどいいかい？」

「珍しいね、ウチに聞きたいことあるって」

”ドール” って知っているだろうか？」

「ああ……あまり聞きたくない言葉だけだね」

「作人くんがドールについて少し知っているらしいんだ」

「どういうこと!?! ちよつと教えなさいよあんな！」

驚いたセクレは作人の目の前まで近づいて問い詰めた。

「いや知ってると言っても”ドールプロジェクト” っていう言葉しか知らないよー！」

「ドールプロジェクト……!! お父さんの遺した本に書いてあったものだわ……」

「そうなの……？ お父さんってそれに関わってる人？」

「そうよ、ウチのパパはドールプロジェクトに関わっていたの。けど、

研究をしているうちに事故にあつて死んだの。でもパパの部屋の机の上に遺書があつてそこには『ドールの存在はこの世のためだ、だがドールは逃げ出した』つて書いてて、ウチは事故にあつたとは思えない」

「それで、ここはオカルト部つて名称だけどドールについて調べているつてわけさ、ちなみに『暗い部屋にいた』と『山奥で倒れてた』と言っていたんだがもしかして君はドールなのかい?」

「それはごめん……わからない、でもちよつとお願ひがあるんだけどいい? 高貴さん」

「何かな? さん付けはしなくていいよ」

「いや、さん付けはするよ。それでさ、僕はここに入部させてもらつてもいいかな? 自分のことを調べたいんだ」

「もちろん! 入つてもらつたために誘つたんだからさ!」

「じゃあ、こつちからもひとつお願ひがあるんだけど聞いてくれるかい? ここ飯ヶ谷高校では夜の特定の時刻になると斧を持った大柄な怪物が追いかけてくるという怪奇現象が起きるんだ。それを今夜調べてみたいんだが付き合つてくれないかい?」

「うん、もちろん!」

「もちろん、グンタロスも来るよな?」

「あ? え、あ? うん……あ?」

「じゃあ今日は俺、軍、作人の3人で夜21時に学校に集合!」

「おー!!」

何のことかわからない軍、探求心が強い高貴、友達ができたことに喜ぶ作人の3人は手を合わせて天井に向けて腕を上げた。

「あんたたち、親に心配されないうちに帰りなさいよ」

——夜21時、飯ヶ谷高校

「ねえ、夜に学校はいるときつていつもここから入るの? ものすご

く狭いけど……」

「そうさ、学校でこの入り口のカギさえ外しておけば、いつでも入れるのさ」

「なあ、これから何すんだよ？」

飯ヶ谷高校の倉庫に大きな換気口が存在していて、そのカギはロックされておらず、事前に外しておくことにより出入りが自由なのである。

ただ、巡回警官の目を常に盗む必要がある。

「よいしょつと……気を付けて来いよ」

「何度も侵入してると慣れたもんだね」

「何度もつて……本当はだめだよこういうのは」

「大丈夫さ！ オカルト部顧問のコネで免れるさ！」

「作人、こいつはこういうやつだから暗黙の了解をしたほうがいいぞ」

「あ、うん……」

倉庫をこっそり出ると、調理室があり、そこを抜けると2階まで筒抜けのホールに出ることができる。

「確か、ここのホールで待っているとやってくるはずだ」

ドス……ドス……ドスと大きな足が階段を下りて1階のホールまで向かってくる。3人の目で見えたのは、見上げるほどとても大きくゴツイ身体に顔はマスクをしていてよく見えず、茶色くボロボロなタングトツプに黒く穴の開いたジーパンを履いた大男だった。

「そろそろやばいんじゃないか……？」

ホールにある窓から見える外は雨と風が強く降りだす。

「ううう……ううううううおおお!!」

視線をこちら側に向けた途端、大きなうめき声を発しながら斧を大きく振り上げ、俺を狙って振り下ろしてきた。

「危ない!」

斧を避けると、ドオンという音と同時に学校の床に大きな穴が開いた。

「逃げろ!」

「どこに行けばいいの!!」

「3階の第一理科室にライトがあるはずさ! それを取りに行つて光を怪物の目に当てて怯ませて撒くぞ!!」

階段を2段飛ばしで駆け上がっていき、第一理科室まで走っていく。ホールと第一理科室は端と端で、階段を2階まで行き、廊下を直進し別の階段を使つて3階に行き、さらに左の廊下を直進して奥にあるのが第一理科室なためものすごく遠い。

「ちよつ! あいつ意外と走るの早くないか!」

「足が大きくて大股なだけさ! たぶん! うんたぶん!」

「たぶんってなんだよ! てか、ここでいったん別れたほうが良くないか!」

「じゃあグンタロスがおとりだ! ホールで待ってろ」

言ったからには責任を果たせよ、グンタロス。

「おいおいおい待て待て待て! ぎいいやああああ」

俺がおとりつてどういうことだ! いや、わかれた方が良いとは

言ったけどよお！　たく、コウちゃんは人使いが荒いな！

「おらあ！　こつちこいや！」

「ぐおおおおお」

案外、簡単に挑発に乗ってくれるもんだな……。

俺は斧を華麗にかわして怪物の後ろに回り込んだ俺はホールに向かって走っていった。

「おらどうしたあ!?　かかってこい」

しばらくホールで走り回っているが、自慢のスタミナを持つ俺でもそろそろ限界だ。

「ぜえ……はあ……くっそ……もう走れねえ……」

再度、怪物が斧を振り上げる。もう絶体絶命な気がする。

その瞬間、光が現れてその光は怪物の目へとクリティカルヒットした。

怪物は目をやられ、斧を振り下ろしたが軍を外して横にあつた棚が壊された。

「ぐおおああああ」

「間に合った！」

「遅いぞコウちゃん、作人！」

「どうだ！　怪物さん！　……いや、なんでこつち向くんだい？　斧を持って振らないでえ！」

怪物は弱まったが、斧を縦横無尽に振っている。

ライトを当てた高貴が狙われ、どんどん追いつめられる。

ズババババンツ!!

銃の音がホールに響き、弾は怪物の体にあたり、怪物は吹っ飛ぶ。

「お前たち、これを受け取れ！ ドールが悪霊と化した”スプーキー”を倒すための装置だ」

黒いスーツに包まれた大柄な男はベルトのようなものを3人に投げ、それを受け取った3人。

「そいつは対スプーキー用に作られた変身アイテムだ！ まずは腰に巻け！」

「これは……？ うっ……」

作人の頭の中で思い出す、暗い部屋の中。

~~~~~

中年の男性2人が揉めているようだ……

「これは私の発明品だぞ！ 君に渡すわけには行かない！」

「しかたがない、これは世のためだ」

「世のために私が必死こいて作った代物だ！ 渡すわけには行かない……ぐはぁ！」

ナイフを取り出した男が、話していた相手を刺した。

刺された男は床へと倒れ、そこでふと現実へと戻る。

~~~~~

「これは……使いたくない」

「こんな怪物を倒せるなら……俺は戦う！」

「ドール……？ なら僕はスプーキーを倒してドールを追い求めるために使ってやるさー！」

軍、高貴は自分の腰にベルトを装着し、ベルト横についていた絵が描いてある丸い皿のような形のアイテムをベルトの中へ挿し込んだ。

「PURSUES READY?」

「DEFENSE READY?」

高貴はベルトについているスイッチを押して回し、軍はベルトの上についているスイッチを押す。

「GO!! GO!! SMART WHERE AM I」

「GO!! GO!! SHINING DESTROY ME」

ベルトからコンロのような形をした出てきて、高貴の足元に置かれる。そして、緑色の炎が噴き出し高貴の体を燃やす。

「あつあつ!! ……ってあつくないぞ?!」

高貴の体にはコートのようなものが装着され、頭にはコンロが4つに分離したものがくつつく。パツと見、魔法使いのようだった。

一方、軍はボックスが現れ、閉じ込められる。すると、軍の足元から頭のとっぺんにかけて湯気のような煙を出しながらどんどん装着されていく。

「閉じ込めるなよ! てか、なんだこの足!? うおおおおおおお……
お、解放された」

軍の頭部は黄色い3つの角があり、顔面は太陽のようにオレンジ色に輝く。体全体は赤く塗られ、首元、腕、膝、足は黄色いパーツが取り付けられる。

「ええ!?! 姿が変わった!?!」

作人は2人の変身を目の前で見て驚く。

「よっしやあ! やってやるぜ!」

「さて、決め台詞でも作ってみるか……ごほんごほん、キミ、覚悟してくださいね?」

怪物は斧をぶんぶん振り回すが、軍は斧を指一本で止めて弾き、片足キックした。その後ろから高貴が銃を使って怪物を打ち抜く。

「よし、高貴はスイッチをさらにひねって、軍はもう一度スイッチを押してライダーキックだ!」

「ライダーキック? よくわからねえけど……ここを押せばいいんだな?」

「BURNING MY SOUL FOR YOU」

「スイッチを……押して……強く回す!」

「FOUND YOU」

軍は複眼が輝き、足から炎を出して浮き上がる。

高貴は分離されたコンロのようなものが再び結合し、足にくつつき炎を点火して浮き上がる。

「RIDER KICK」

「おりゃああああああああ」

赤い炎と緑の炎が混ざり合い、怪物はどんどん体温が上がり、雄叫びをすると同時に怪物の体を2色の炎が貫く。

「ぐおおおおおおああああああ」

怪物は大爆発を起こし、校内のホールに煙が立ちこむ。

「……お前は!」

「なぜ君が……」

「やはりか……」

煙の中、怪物がいた位置に倒れこむ一人の女性。

——その女性は一体、誰なのか